



1278
15

村田



朝夷巡嶋記全傳第三編卷之五

東都 曲亭主人編輯

中輯第廿九

夷使の沐猴弁
衆兵が大夢覺

修羅五郎經任が使者蕪途鶴東二暴道種々の饋物を齎して
既下席は著しく水草十郎昌甫主人元晴がけこみ向ひてその姓名
執達を當下蕪途鶴東二ハ膝を扇を突立り元晴より對ひ
莊司殿をたのみの見参あり君經任將軍ハ源九郎判官の陰見
あり初め義經朝臣遮那王丸うりて死鞍馬をせり富國は赴き
將軍時鎮守府の館に在せりと死大河太郎兼任主が妹は野合て男を
産せむひたよりと兼任その見を養ひ取ることか子とて修羅丸と名つけ

朝夷巡嶋記全傳卷五

より経任の軍則是あり。さるに往時建久元年大河河が義旗を
挙る平泉は起り一ハその亡君泰衡按察使の爲の事あり。實ハ
こが修羅公を奥羽の主とせんとなり。あつたれども成成らば平泉の
柵攻破られ兼任のへあつても首級を鎌倉に贈る。一時経任
の軍総角より田を衝た柵を破る。若鷲山よりけ登りそくは仙家
三歳を送りて武藝軍略隱形の術習ひゆとてわたり是よりあつて
大志あり実父判官の諛死を憤り養父大河河の志を嗣た義兵を
厨川は起りあつて九州民招むる。属後ひ諸酋戦せし。臣附り遂ハ
平泉の柵を獲る。大將軍の居城と成り。鎌倉の三千餘騎なるハ
蟾蜍が斧をもち車はむる。異あり。刀野時夏を泉河原に擒む。
足利義兼を鎮守府に追走り。江刺裨継の両郡を獲る。和殿ハ

秀衡の舊臣より。鄰郡はわりあつて。あつて胡越のわたりとあせり。征伐
踵を旋る。討滅せしめ。のれども國の宿老より。斧鉞を
加ふる忍びぬ。今暴道をのり。諭示せしめ。仰の趣別談は。だ
和殿ハ孫女莖姫因色無雙の姿あり。修羅公のまご。御臺所は。ハ
まさば。早く平泉へあつて。せく中掃を執り。びへ。通納聘の件。饋
下は。あり。台命因て。件のごり。速に兼あり。拜受せし。と。横柄は。頭
反り。く。演述を元晴。あつて。冷笑ひ。使者の口状。あつて。を。ぬ。を。た。り。判官
少く。秀衡の館。は。あつて。と。死陰見あり。と。を。た。は。實。は。さ。る。こ。と
あつて。あつて。こ。子。嗣。信。忠。信。ホ。ハ。始。終。彼。君。は。仕。へ。り。の。こ。し。や。他。人。ハ
あつて。は。とも。渠。ホ。が。あつて。と。あつて。は。あつて。経。任。が。す。も。あつて。判。官。殿。の。子。を
い。へ。り。の。世。を。迷。は。り。民。を。釣。り。奸。詐。あ。つ。て。疑。ひ。や。と。あつて。偽。こ。の。い。ふ。と。も。

判官殿と父とあつた。これは婚嫁を徹すへ禽獸のけひに汝をばや
 姫判官殿の息女と高館の城攻られくおん父判官自焼のと死猛火の中
 より救ひとうく元晴が孫と一字に近属蒲殿の息子あり吉見冠者妻
 うりかれが撰家柳宮より婚嫁の徴ありとも整がらぬやあつた況叛逆賊
 首の經任霎時狩場を脱ぎ雉子猫盗見們が妻を恋ふとく姫の
 さうとが家の牝猫とも与人や壁を穿梁を跨りて盜貯る白銀巻絹
 目が白眼を撒さんやとて去と敷圍つ扇を丁と突入れく反くさ
 素木の臺の脚の折けく立ちしもか死使者の名を負ふ心の暴道怒れ
 面色朱を沃たせ刀の鞘まを掛れば鬼隔んと昌甫守詮主を守護
 あく詰寄せさう勢ひ當りたるれば鶺鴒東二氣色をやくげく驟然と
 うら笑ひ莊司ぬへ大人氣や鎌倉の故幕府の伊豆国の流入ありしは

武運めさく平家と滅し六十餘國を横領せり。これも亦君を凌だ
 公家と蔑せし偷見ありや。さうより執權時政外威の威を逞しく
 幕府の子孫を絶んとし奚ぞ目が修羅公のこころと賊首といひ
 べ張や只成敗あるもの浮薄の議論取る足らぬ又修羅公を
 義経の息子ありとせし死に筐姫も判官の息女といふと甚不審
 あつたも先とく吉見冠者義邦は妻せり実あり後婚嫁ハ護
 まうく足下の陳謝はよると死に姫ハ平く修羅公の妹あまらあつた
 措れど義邦共侶平泉へ迎とうむはんとうく遮与いといへば元晴
 頭とらち掉愚あり暴道汝富苗那が辨をりて言を両端は持さう
 とも誰う実支とほつものわらんや吉見殿ハいぬる比時夏は誣られく
 逆徒の汚名を立られぬへど矢塚達六が白状よりく邪正あつたつた



鶴東二わた

水戸十郎



鶴東二計
信夫莊司
館小使

庄司

三郎

赦免の召状近たありかき彼時夏が首を取て家裏は成よぬ
 せんともふのそ汝還らざる去れ無益の舌を動さば身首処を異せん
 退くぞめと罵りしれバ昌甫守詮左右より誘立れを催促を鶴東二
 その言のゆれざるを引提く身を起し利害をみるぬ愚人
 千萬句も无益之立ちへりこれらより修羅公より上ん大兵一討館小
 臨まバ瓦石と共に解んのその時よ後悔せを案内せよと両老黨
 睨へかろ退かろ當下莊司元晴ハ若黨夥召近つけ云と分付
 きばろけぬと應つるみく件の饋物を運びかへし鶴東二が後
 者よ遞与ろる程よ次の間ぞ竊攻る義邦ハ紙門を細く推開て
 霎時そあぞ目送りつ廣光共侶立ゆ元晴より對ひ彼暴道が
 面魂経任が股肱のの吹かて撃面ぬへり渠案内を知れば

経任かろバ衆と喝し之當郡を攻撃へし彼めをかへされぬ
 うそひといへ元晴より微笑を推量のどく鶴東二奴ハ修羅五郎が軍師
 かくしさればそ被奴一人奪取とも経任か亡るやわは渠ハ獲は二三十人
 その小勢あるをとり取籠る獲はは弱きを示せものこあせバ経任
 時日に移さざ大軍をめて推寄来つべしとがめりて返せしは
 武勇悔りぐくかろくは鬼胎を抱ん故は孫子よ云凡明君賢將ハ
 動くも人ハ勝功を成と衆よあす所以の者をよ先これを知むべし
 先これを知るものハ鬼神も取るべし度妻も象も度度を驗そ
 べし必也人よ取て敵の情を知るものこつり這奴既ハ情を知られ
 間を用る所か経任決して寄すろふは然といへども非常の備肝
 要よいとこの掌を指せど説諭され義邦ハ廣光をえりつ

共は感嘆をうくる。暫くして城戸守詮彼鶴東二を追かへせしその日の為
 体を元晴義邦に報知せ其腹心のものをめて鶴東二ホゴ跡を跟せしが
 終賊地は還るや否をんせしと密語バ元晴はさうち領地を
 よく謀りなれ敵は英氣を示せしをも悔むるを悔めし昌甫と
 あろを合して境守の兵を倍せ防禦懈るべしと可寧は説示し
 是より主後うち聚るをりく軍議を凝したり。却説件の間諜者
 その夜深より来り蕪途鶴東二暴道ホの要時も途は躊躇せし
 泉川をうち渡りて平泉のこへ去りぬ。され彼饋物を阿容ことめて
 還るを面あやひん泉川へ投入れ推流しひ川を渡せをん
 届され其の河原より引くしと告まバ守詮さもいと件の間諜者
 勞ひの馳く度の赴を主の元晴は披露せり。さう程は鶴東二は管は

馬を早めくその夜平泉は立かへり修羅五郎任任は元晴がひひり。皆
 縁を兼るやを巨細は告る。任任は又大に怒る。かものども
 声をゆり立老老奴いふ。これを輕はるやあま至るや。その議ありバ
 推寄せく一戦は踏潰せん陣おれせよと逼る。鶴東二騒ぐ氣色
 を。元晴は憤り。これども元晴は老兵小敵ありと侮り。一裨貫江刺の
 両郡新は味方は属せれども機は臨く。変を生さバ元晴意外の援を獲ん
 桃く。其既に彼処に到る。ゆり。便宜を獲る。この故は
 元晴が無礼を咎め争ひ。十分渠を驕せ。饋物を運びかへし。これを
 泉川へ捨せり。この跡を跟る。あまんと。これを。其の
 白銀巻絹の物一つも失は。豫より用意し。推流せ。質物。元晴
 あり。そのを。其既に面目を失ひ。又。謀め。おもん。

かくの如く敵を弛べく兩三ヶ月を送りかへ元晴義邦が首と共ニ
 姫を取んと籠中の鳥を鑷より易うりその謀ハ如此く之箇様
 密語ハ經任ましく莞尔とらり笑まこの謀甚より曩ハ汝れを資
 時夏を擄わし更ニ亦間を用ひて義兼を走りしりあられどもその
 功ハ誇らば兩度の軍略神妙之努秘をべしくと閑談時を移しけり
 案下某生再説駒形村あり馬兼標吉郎嗣忠ハ圓山の館あり
 義邦は仕らく元晴則標吉を廣光が次まどせし一隊の火長
 防禦の軍配間断なく再々經任追伐の鎌倉勢を程年
 終りも十日あり三日四日との比は國府の使札到来して執權北條
 時政の下知状と通達し吉見義邦并家臣江廣光及び義秀
 井平亦逆徒の變えありといへどもその無実なるより悉く赦免せる村

落邊鄙に至るまでこの旨兼知まといへり義邦も元晴もかくあ
 べいと豫てありあざろはあはれども又今さうのりはゆがえく一家の
 歡ハ疆かかくて新璞のとう立かへり建仁も三年あり正月ハ
 よろづは勢多くて梅を挿頭の暇かたれ義邦も廣光もこの春むり
 春めた餘寒の去るを待たざは紅梅匂み如月の上旬ありより北國ハ
 おと深雪あられどまが冬のとくあわらど廣光ハ只管は稻向許赴て
 朝夷が音耗とも向むべく又その婦人友鶴が安産のやうとも訊んとつ
 義邦もつらまのりも元晴も告し元晴も越の若上への信もあ
 措へたのりも冠者ハ既ハ世間廣くありあひぬ又蒲殿のおん子
 と鎌倉殿中も知られしりあ彼安達盛長が冠者の外祖父あり
 在鎌倉ありかれハ三二を鎌倉へ遣し安達は就て冠者の零落の赴を

愁訴一經任誅伐の軍兵をなつて義邦先登進んで逆賊を討滅し
 亡父の汚名を雪んとあひむくはせしめたり。往時建久の比故幕下
 冠者の外叔景盛何よ白鳩丸の云と宣はせしむるありしは
 年来安達何よ疎遠は過さぬは世は憚のゆゑ今この便宜を
 りく愁訴せんは彼人への君が外戚あり執達せしむるありしは
 案内の人のく安達父子は識らざればこの使を今更よ外人に委
 又越中岩上の稻向への馬艮標吉を遣はし朝夷生今に必彼処よ
 ありといふおもむくはむとの音耗のありやいや家内の安否を問
 標吉郎は彼人への初対面といふもむらう死使あつたこの議は
 又とよ義邦これを諾あひて標吉よを告る行装を整え義秀へ
 与を状と書写めく標吉は遞与し又安達父子へ與と書翰を廣光よ

遞与せし廣光ハ稻向夫婦一三ホ及むが妻の浅良井子消息して
 標吉よあつて遣はし又元晴ハ呈書一通よ西三種の土産を士卒八人
 又廣光よ俱しく鎌倉へ遣んとを準備せし二月三日の早旦よ
 廣光ホハ鎌倉と投て啓行し標吉ハ後者西三人をゆて越中へ赴
 又四五日を經る程よ日草口澤の村長ホ陸續して人を走らせ信夫の館へ
 注進はし鎌倉の宛使安達景盛何よ来臨あり縁由を兼るは將軍
 台命あり言見殿を召させしその旨よ云景盛ハ冠者の外戚なるにあり
 この宛使を兼るは本郡ハ賊地は近より因る士卒三百人を練られり
 口澤の郷よ人馬を駐めく案内を待りのもよくこの旨を信天莊司ホよ
 告ありありと注進はすと喘演説をこの時莊司元晴ハ聊餘寒小
 冒されくあが臥蓐の中よわり件の注進をすくく歡しよ病苦を忘れく

遠く起出づ若黨を以て義邦よこの趣を報知せしむ。詭使應接の
 準備をのぞき義邦少水草十郎昌甫と辨貫九郎ホ六七名の若黨と
 三十四人の奴隸を属之口沢に赴せ來使景盛を迎んとす。主後齊一
 混雜をかり時中も城戸三郎守詮ハ立り騷が。既ニ衣裳を更めて之を
 せし義邦を推すめ主の莊司を諫之のやうか。俄頃鎌倉より
 安達河をぞとれ冠者を召させぬ。熟思へばさるるゆゑ。實よ
 そのうあらん少水草の驛馬を以て云々と仰下る。是れを以て
 實を撈らん。冠者の病著ありと稱し。其口沢へを來り。景盛の
 迎へん早。少水草以後悔ありと。密語ハ元晴。霎時尋思して。法
 疑念。可。然。死。あ。わ。る。縁。ど。冠。者。も。これ。も。病。は。托。て。應。接。の。礼。を。缺。り。バ。
 外聞。遂。は。脱。れ。さ。し。不。敬。の。咎。め。を。い。ふ。ハ。せん。これ。あ。は。し。執。權。遠。州。ハ。

時政遠江守も惣仕せり。王莽が野心は做れと久し冠者ハ蒲殿のちん子。これよりこれを遠州といふ。 王莽が野心は做れと久し冠者ハ蒲殿のちん子。これよりこれを遠州といふ。
 こを鎌倉に請待して將軍の權を割んと。是より火急の召の侍飲
 ちんバ豫々驛馬の前御中と疑ふ。汝らとく速慮せむ。かくは
 悔あらん。冠者ハ何とあひあつと問れ。義邦小膝を進め。莊司の推量。愚意ハ
 ちんバ狐疑して。遅くせば不敬あり。津谷日草ハ敵地はわつた。あより
 口沢へ遠く。は仔細あて。死すとも。わがえ。義邦みづ。彼へい。死。て。
 詭使景盛を迎ん。勿論よ。進む言葉ハ守詮ハ諫う。ひく。又い。あ。う。
 ちん。ん。少。水。草。の。百。餘。騎。を。招。く。冠。者。ハ。後。ハ。非。常。に。備。へ。し。とい。ハ。昌。甫。
 進。む。出。某。冠。者。の。ちん。供。ら。よ。三。郎。ハ。復。百。餘。騎。を。添。ら。ま。ん。ハ。あ。り。し。時。
 べ。但。後。者。の。員。を。倍。く。士。卒。五。六。十。人。を。從。へ。ぬ。支。足。る。べ。し。とい。は。し。
 ちん。元。晴。義。邦。の。議。を。任。し。更。士。卒。の。員。を。倍。し。義。邦。ハ。烏。帽。子。の。

紐を結び添狩衣の袖繕ひて閃りと馬よりち跨れば水草十郎鱒貫九郎
 その他の士卒先は立後には後ひ齊くと口澤を望み移りかせば元晴の端近う
 立ち守詮亦共侶は祝してこれを目送りなり程は本所はあらず卒ハハ
 門戸の掃除路次の盛砂説使の儲は奔走しておのど時を移せよと信夫
 莊司元晴ハ病を推して礼服は更り正門の方より大床は林几を立させ城戸
 三郎守詮亦その左右は居ぬれ説使の来臨をまつ程は俄頃ハ外面
 騒しく注進と呼ぶて走来するもの別人あり曩は義邦は俱しなる
 若黨鱒貫九郎あり矢傷金瘡影しく全身朱子染かろ縁頼ちうく
 礮と坐はへ何れぞと元晴ハ林几を放ちくもみ出城戸三郎自餘の輩
 ろか縁頼あり立ち仔細いやを尋れば鱒貫九郎ハ右を折屈け
 鮮血を吸めく息を吻死されば吉見殿鎌倉のちん使安達河は對面

せんく口澤多る莊官が門前を馬より立ち進みて書院は赴死かハ
 待設る癖者共帷幕の内より三三人立ち頭れ出矢庭は冠者を
 組伏し後方は後水草十郎この為体はかどら死怒りいらく冠者を
 救んと大刀技醫して割て入り多勢を敵は戦より當下賊將をあり
 立汝亦既謀は陥りかかろ誰為は狂おやかくハ修羅將軍の御内を
 四天王の隨一とぞをさる神井鬼六猛虎あり這奴敵對其義邦ととく
 刺殺せと鳴き昌甫とよは辟易してその大刀風や風うらん遂は衆賊小
 智ををれ叶ふくもあつたれば刃尖を口は衝く推串死々死々外画は
 ゆひ其ホハ大刀音は大变ありとんくければ士卒必死とらひ決り後
 刃を晃し書院は乱入んとはる左右の牆の蔭より賊兵懸群り
 出刀野時夏あまひり何処へとて遣はるを彼撃苗よと鳴つ味方

敢敵を擇おど二隊より戦へども賊の素より大勢之鏖を揃差
 詰考詰射る矢は面を向うて外より敵をある其ハこの身を報知
 おうさんとあひらぶ幸く圍を殺脱より主従或ハ擒まされ或ハ
 敵の勢十倍してこの処へ推寄来んとおもてこの深瘡でハ
 再度の役も立がし是おどまけしひつて首を引技なく腹掻切く伏
 ころろ元晴ハ愀然と天を仰ぎて嘆息し天ある命ありかこれ
 偏は吉見殿をせよおえんとあつて只管は早更守詮が諫を用ひ
 鈍くも賊は謀られて是既にあよ及べし士卒ハ過半境を成らせ今又冠者
 後ひくせりもの少くは防戦んと叶へるべからん然あつて主従ありを
 一致して敵の圍を衝破り脱れんとハ難くもあつて既に冠者を擒ませ
 らしむ誰とよげ一日の老の命を食ふべし敵推寄あば防矢射させく

賊肚を切らん守詮の其期及び菅姫を刺殺し館は火を放け焼き
 軍期の準備をいそぐとく臆く奥を入りより當下城戸三郎ハ家中の
 男女を召集めく老るもの雅記の婦女輩ハ悉後門より落し遣さる来
 莊司の恩を感じて面らんと願ひは多かりそが中ハ血氣盛な志あるもの五十
 人は正門を守らせ三十人は後門を禦せとの勇ハ後十餘騎を相中門は
 あり妻の婿竹を召ていあや今内主君ハ姫らんと云云と仰しども一圓落し
 共侶は命を代るべし同胞心をわらひてく姫らへは具しませり敵の推
 寄せざる間ハ後門より脱れ出越中あれ鎌倉あれ便屋のこへせん共せよ
 鎌倉あや安達履越中あや婦員の若上稻向判五とくづひや稲廣光
 嗣忠使しく東北はわりとわてもこの変を傳せよ必難は逐ん去りくハ

その二人は一人の途で逢ふ。逢ふものあり。是れ亦敵を欺け、姫うへを後
 也とく落し、あつせんともあつ。あれども彼経任が欲き所との第一、姫うへ
 あつん途は衆賊は追首られ、脱れぬが主従三人自害を外あつた。
 とくつとつとが立れ、燭竹の精悍く、應ととも煩伏のこれやこのせれ
 別とともへ立わたり、去るも涙みおといひ、はるが守詮眼を瞪し、
 つまゆくと追とつとつ折る、はるが具鉦大鼓正門の敵の大軍推寄うと
 ながりて、天地は響く、関の声、弦音夫叫馬蹄の裏に、いづも隙を死戦ひの
 中を脱す、燭竹の鳩鳴江と共、侶は笹姫を扶掖死柳の腰、拙の天刀、袂と
 後門より走り、おれはあつ、はるが名残を惜む、女房乳母が泣声、背後より
 たり、さる程は賊の猛虎、時夏前後の門を攻破、まゝ真先ゆき、進み入、藤と
 期し、さるり、おれは城戸三郎守詮、中門を颯と開せ、彼十餘騎を左京

備へ、面もあつ、はるが撃、靡け、鬼六と馬を接へ、十餘合戦、やうり、刀尖當り
 り、これに鬼六の浅瘡を負く、十友あつ、退け、時夏も、誘引れて、正門
 を逃、さるり、その隙は守詮、中門は引入り、味方の討死を教む、はるが
 四五騎、ゆの過、さるり、こも、も、数ヶ所の深瘡を負く、再び戦ふべくも
 あつ、ね、は、是、も、さ、る、り、と、あ、ひ、ひ、え、主、君、は、自、殺、を、勸、ん、と、馬、を、閃、り、と、兼、さ、ち、
 奥を望み、走、あ、つ、は、る、が、信、夫、莊、司、元、晴、の、崩、葱、威、の、身、甲、は、緋、地、の、
 錦の直吉、極く、精好の奴、袴を、展、ら、せ、ゆ、り、乱、し、さ、る、り、白、髪、は、鉄、打、を、鈴、巻、
 ち、く、重、藤、の、弓、に、握、太、あ、つ、は、る、が、鷲、の、羽、の、松、箭、を、刈、ひ、矮、樓、の、窓、に、用、を、て、
 あ、つ、入、る、敵、を、射、落、せ、と、十、四、五、騎、は、及、ぶ、と、い、へ、ど、も、目、は、餘、る、大、敵、は、九、牛、が、
 一、毛、あり、味、方、の、士、卒、は、漸、く、は、る、が、残、る、の、守、詮、の、と、あ、れ、は、今、の、死、に、死、
 時、と、つ、と、つ、蕭、を、憂、哩、と、披、捨、つ、徐、に、階、子、城、を、り、立、く、書、院、の、さ、る、り、追、ひ、

城戸三郎守詮ハ立矢を兼毛と折りて遠く走り来つ味方の士卒
大半斃れ敵勝り来いハ合戦ハ是れ也。見自害のへうと着れがら
點頭もあつたかへも。菅姫を逆賊を奪取れと云く火城
放りていへば甲の上帯切をち腹一文字は撥切て吭を突て
守詮ハ慨然と背を拍く身と起し後堂よいゆれこれハ姉母
老若の婢女們自殺して死骸ハ箒と茶茶如し武士の家は住り
わつたはりやうにも有繫は良れゆやう。と云はれりやう
とぐ中ゆく菅姫は似る女房の亡骸の上坐し推居て姫の衣服をうら
掩せ彼等は走達し一度は火をど放りたる。と死神井鬼六刀野時夏六
るゆ守詮ハ覺悟され敵の多少をわかれ中門の前へ也して
人馬の息をつぎをる。彼此ハ火發りく大厦高樓倏忽は黒烟の中か

ありとハ元暗ハ自殺せり。菅姫をか焼死しを救ひゆせと罵り駈死て
中門を打破らせ時夏真先ハ騎込て懸る馬より閃りと云り立書院の
へ趣く程ハ城戸三郎守詮ハ賊の大おを撃んとし首を半抜りけ
廊下ハ横り陽死しとけり。時夏ハよくもんを踏越んとり守詮
臥あがりし首を抜く横薙り。向脛丁と砍つ。は実ハ死脚甲を
け。六條鐵半分砍込。裏をかきわかれ。時夏吐嗟と怪飛と膝
打布立んと。守詮岸破と反起り。疊菴を撃つ。時夏あつて
辟易して既ハ覺え。あつて見らる。鬼六猛虎走り来つ短刀を抜削め
守詮ハ背よりその草搦を推揚く。巻も徹とごとと刺と灸所の深
あつた。えうへり。あつて仰反り。と云を引倒し乗かりて。馳て首を取
る。惜むべし守詮ハ智勇忠信人ハ優れ。その功あつた。あつた。主従らふ

圓山の館
元晴守詮
等戦死を



草子之巻五

運弾之悪逆虎狼の後よ移れぬてを哀れぬ。そのこの下を説計の
 豫て蕪途暴道が経任よさぬ。勧めく更猛虎時夏よ五百餘人の
 賊後を授けその二百人の駒形の中は隠しおれ鬼六猛虎を安達
 景盛よ打扮刀野時夏ハ安達が家臣よ扮しその賊卒三百人の鎌倉
 様の行装し一栗原賀美の山路を打越く遠田郡より遠り入り日草
 口澤の莊官ホを欺死く莊司が圓山の館へ告知させ吉見冠者義邦が
 来迎よ及びてそやく莊官が一家の男女を砍殺し遂は義邦を擒ふ
 あく水草十郎を惣取り更は件の二百賊をうり合して元晴が館へ推
 寄せ信夫主従を殺剝して筐姫を畧んと謀りこもは是去歳の冬
 蕪途暴道が圓山の館へ使して筐姫を徴し元晴拒きて暴道を
 罵り筐姫ハ近死し言見冠者は妻せり又義邦ハ蒲殿の死しや

み又連六が白状あり赦免近死よあるごとく怒よ来りて説きせり
 暴道ハこれより元晴ホを謀らんと欲し程もく間諜者を圓山の
 館に入れその便宜を窺せし今茲二月に至る江二廣光ハ義邦ハ
 外戚あり安達盛長が鎌倉の宿所へ赴け馬養標吉郎嗣忠ハ越中
 婦負の岩上へ趣たさし件の間者が告ぐ暴道ハ更をわぬと
 歡びて遂は猛虎時夏と謀をせその方寸は陥し唯城戸三郎
 守詮のその虚実を揣し元晴を諫め義邦をさめしりども
 元晴義邦ハ詭使景盛とめ惑され帰泰のめひ歩し守詮
 諫言を用ひざる悔ハ

中輯第三十

嵐の庭に連理木
 春よ遇み羽生の梅

却説猛虎時夏の敵一人もあくなりなれどもこの日西南の風烈しくて猛火
 八方に散乱し近づくもあざむれが且衆賊は火を滅させ焼落て後
 影の死骸を展檢ひるは書院の焼迹は元晴をとり又後堂のこゝは女子の亡骸夥りの上坐は爛
 爛れりものこれ筐姫ありとて衣の褌の焼残りるを引断離る證
 と兵糧財物大なるを焼亡され軍の勝れども利はほのり郡縣
 の又一物の取る足元も膿緊要なる筐姫を焼殺して功は誇り賞を
 求るもあはれ猛虎も時夏も腹たたりとて諄々と賊卒を叱り懲ら
 その夜の焦原は陣取る人馬の足を休め黎明の比衆賊を進め
 元晴が正方寺の枝城に推寄られども境を守る兵はもろく落せ
 るるものなりよと近辺の民家より入りて米錢を掠奪し男女を

屠殺しあはれ妍に女子あはれは白昼は輪衣を乱妨狼藉のあはれ
 暴ら荒しと第三日は平泉へ凱陣し賊首任任は合戦の次第を告ぐ生
 擒義邦と牽居元晴が焼首并昌甫守詮が首級をんせ只被肝心の
 筐姫はもろくも自焼して烏有となりぬ城戸三郎守詮が防戦は時移りて
 いふおともをべありに更は過怠なひのどと猛虎時夏辞齊一更の為体を
 演説して焼残りる筐姫の衣の褌を證據とて當下修羅五郎經任は
 蕪途鶴東二暴道珍浦五五六方相ホを従へて端辺うづつ實檢し
 件の衣は褌とんく蕪然とらち笑ひ猛虎時夏をかくの如く疎忽ある
 筐姫はこれや獲らうと牽出せと叫立れば婢女們五六人老女雜り立
 かり姫の左右の身を合く高欄の下は推居れば筐姫は泣腫せし目
 むもんまがぬ義邦の高は小を傅られ屠所の羊は異なりぬ

形容よ又宵潰れく喃が伏飲浅すやん痛しやと声立き走りやんを
階より膝衝く阿摩多と遮り留る婢女們が拮据忽ちぬ衛は身之動えを
伏沈つ泣あふ義邦も筐姫の声は聞らる眼を垂るれば恨之のちを鏡曇
るハ宵の咎を心かち家おれ吾妹子が歎きさこそと推量るハ身の薄命ぞ
かてり抑九歳の八月より十九歳の今茲まで霎時も安堵のあひをせはせり
やく釋し冤屈ありわ不恥し傳索かす浮身ハゴ外よ又あそいやといへが
えよ若も堰さる苔清水かづらひくもわぬ世よものちもつと頭を低れ死を俟の
外かろなり當下猛虎時良ハ呆く神社頭ある高麗拍の如口を閉た正く
焼死しうとえし筐姫はいくわくあふお現せやんちか不審と吐けハ蕪途
鶉東二進と出其も暴道が討畧に彼守詮ハ頗思慮あり義邦擒はわぬと
ぞく敵の奇けんを揣さく筐姫と落し遣まへし兩頭領あはれく只

攻撃す時を移さハ元晴ホを撃とるとも名さしれおと走りくハ勞して
その功おれは似うとあひよれはこれも亦三百餘人を殺へて和殿ホが後
あり推せ元晴が采地の巷門毎は部しく落人をあ程は果しと本日
黄昏よと雄々しげある女房西人主の息女とかほし死美人を扶掖つ
駒形の麓の小野を過るありその為体向たりて筐姫とんとくれば至卒を
進やく推とう卷せ生拘んとあもども彼女房ホ刃を引抜三人よもを
負せ二人を夫庭は砍仆して縦横無礙は防戦ハ大刀風いづれも烈たれば
女子とと侮がし味方の負ハ数あせども多勢おれば取も逃はれ
幾つ箭よ一個の婦人の乳の下射られ仰ぎあはれ今一人も深き
負ひつ脱れざくあひん走り近つ死伴の美女を刺殺さんとあはれと又
一箭は射て殺しぬその間は彼美婦人懐劍を引抜たてく自害せべくあは



某弓を投捨く飛鳥の如く衝と寄せく懐剣を奪ひ取りその名を問へども
 泣く答へばかて又五七人の落人を生拘つてさうさうをせくその名を問へども
 乳の下を射させる女房元晴が老黨水草十郎昌甫が妻鳩江といふもの
 後射殺されたる城戸三郎守詮が女房婿竹といふもの彼と此との姉妹
 あり又この美人の筐姫は紛れをわといふよりく準備の張興は扶桑和殿
 ホも先づわく將軍を献りぬ疑心を散らへりといふ誇りは説示を福虎
 時夏頭と搔た狗骨折く鷹は捉まるといふ諺はこのよりわんはとく
 感心と口をいへどあつた暴道が能を損とて是より嫌忌のをひ
 わりされども氣色は顯る時夏の膝を進りて徑任をうち向せけ
 將軍この義邦の範頼の子でいへばわく処ふく尊故せり分念の底に
 あつた且某と舊怨ありあつて時夏うけるりて首を刎けんといへば任

領たつ牽去せんとするをえり珍浦五十六諫くいのやう將軍義経のおん
 子と稱しあへど人食られを突とせ既実とせれども筐姫を妻り
 ぬへ判官の爲出塔へ又この義邦を範頼の子といひ世の人もぞくぞく
 彼の範頼判官の兄あり不和をばあくるよ今その子も義邦を誅しぬ
 人のまろ離れ背たぐ竟は大事をなすころんあらは賢慮あはほしと
 いふは経任沈吟しと死のいふせんと同へ五十六答ていのやう愚意よせ
 せりつらふ只この吉見義邦を緊しく獄舎に繋せきとせり牽せしめ
 遣答形勢を筐姫よせせむ義邦の苦痛は堪はぬ筐姫は説諭し
 ぬあろ随せん又筐姫の夫の呵責を救ぬる君が枕席は傍べしと
 とは判官の任ことし義邦を殺さばりて死しむく助けぞして許をよ
 けり是を名利両全とせり真とせり密語より五十六がうのいふや

経任が爲のこわらば暴道猛虎時夏ホ或の筐姫を奪取り或の義邦を
 擄り或の元晴主従を殺しその両郡をとり取り功を捐とて義邦を
 害せんとするを否し筐姫を口説き己が功よせんとするをよこ人の
 機変がらり多切べし問話休題経任は五十六の説きとてあはく
 點頭汝が説論尤理ありやと筐姫義邦を救んとす唐も靡けり
 義邦も又去りけり呵責の答を脱んとおもひ筐姫は説勧め唐も靡けり
 慰めさせよと威徳りてこの女子は迫らんと易れどもそのあは靡ぬ
 わる洞房の中は趣を筐と興へ伴め侍女ども慰よ由断し目
 害とせむ義邦を獄舎に繋せり問断守るべし暴道猛虎時夏
 しが恩賞の功の多少よあはく沙汰せん食この首をさるゆふと此後提
 翠簾垂させく警蹕の声りろ共身を起せ無念と向上義邦は願

是あつては菅姫再びよと泣沈むを誘ふへとく婢女門をも合の伴ふ
 後堂良人の獄舎の阿真地獄佛は神小捨られ絶え對のむ緒も
 限りとえくすのさうのらあは辞別おうせぬもの世の中は花は嵐の妹背山裂
 れく内と外のさへ牽れゆくを痛まりれば又経任は菅姫を獲りり
 いども拒みてのまご後ひび彼文字搦を夜とあ日と夜とをほり小の
 果りく時夏は返れとや文字搦も今さうは時夏が妻ありての四頭領の
 下ありておのづから権もや又経任が側室され人の愛敬大さかろむ
 この故は只管辞を巧みく時夏を嫌ひく経任のくさろ惑ひてさ
 いあつてはせうとや文字搦あつて便宜をほく妬しとや菅姫を殺し
 又と勧めども又文字搦は比まへかやあつては美女をば経任への
 のと生應して後ひび心かぐも菅姫を靡後せんとおれりこの為体よ

鶴東二の文字搦を時夏は返しぬへと催促は経任是をうばさく
 及びて鶴東二を鎮守府の守将とし時夏を副将と居そのと死経任の
 鶴東二は諭はう汝は只顧文字搦が時夏は身を任せし故これ又
 使ふべくとと理りへさるぬれども渠今さうは時夏が妻あることせ
 願ひぞや和余を共よせしとく情をめてあつてはわらねが渠よかいく
 何らあらん菅姫が後ひび文字搦を出しやんそれまでの勸賞は新泰の
 時夏を鎮守府の副将と居寔は過分の大任わらばそれづから諭え
 とく時夏を招死よせ太郎汝は文字搦を返さんと及どもいうせん件の
 女子は病著し卧してのまご起せありて前日の勸賞は汝を鎮守府の
 副将とよ暴道と心を同じく江刺磐井玉造の三郡を管領とす押
 鎮守府は東北の杆城より尤予が安危は係る要害の地かれども久く

敗城とありこれハ速ニ修復せし汝新泰の如くその重用四天王ホノ異
を以テ宜忠戦を勵むべしと真成ニ示せし六時夏ハ拜伏して泰一と應り
あつれども時夏ハあつの中歎バ汝第一ハ文字捐を返さるるを恨み第
二ハ日来あつよりぬ暴道ガ下風ニ立その隊ニ入属られハ妬み限り
かハ老るのよりぬ任を資けく鎌倉へ歸らんものを悔み泣きしと
ろとあつらるるよゆねどもさへ已死にあつれば鶴東ニと共侶五百餘人を
引卒し鎮守府ニ赴けり敗城を修復ししを以てあつ守りたり不題
鎌倉ハ信夫莊司ハ賊ヲ殺れ吉見義邦ハ擒せられ任新ニ磐井
玉造の兩郡を畧奪して鎮守府の古城を兩員の賊將ニ成らせ勢ハ
おろく煽あるより注進悉くあつられ執權北條遠江守時政驚患ひて
評議をかこみ評定衆大江廣元岡注所の別當三善善信ホと追討の

大将を此彼と擇ゆども足利義兼敗軍の後撰ニ應じ死めりありし
されど安達盛長和田義盛秩父重忠を以て先將軍頼朝の功臣ありし
年も老より継台命ニ應じて役ニ趣んとあつたともこの三老ハ任じたり彼
此飲とむり小定めりて日を送り有一日時政ハその子相摸守義時と共に
尼御臺名ハ政子時政の女の御所ニ泰りて件の事をあうし出誰を討む
遣はれりとも相譚あうせしニ御臺微笑く評定衆ガ擇りしを
征東の大将をいふして如実を以て如實の政子定めり死すあつた智ある人
同んのことゆひて後方ニ倚り義時の嫡男相摸太郎泰時をえりて和殿ハ
年尚少れどもその才ハ大人びり何ぞも將軍頼朝の御方ハ憚ること
あつたなり河平あつせよかあつと招かれ泰時ハ阿と應り膝を進て
顔をつ死弱冠の某ガ甘羅の才ハあつと助言ハ慮外の限りしあつれども

このおん席は他人のいふを尋の趣を答ふる所らん不忠あるべし。されば
 兵書の中よく敵を知りて勝敵を悔むるのべし。本文のいふは
 おの彼逆賊経任が形勢を案じつる梟雄にして幻術あり風を雲を起し
 樹を伐く士卒と石を撲く牛馬と一五兵六道自由をばり今鎌倉よ
 智勇の武士多しといへども二の足を踏むこの故に現名する大小名此度の討
 るは擇れく復ち負するあふとの身ひらの瑕瑾ありは柳營此
 御威光も亦薄たを似せん彼の愚意を以て擇むるは前駿河中源廣綱
 朝臣よおのめか。この人はいぬる建久のちの聊不足のりありて忍心は隠
 遁一年來武蔵崎玉ある太田の莊ありと安り迹を村落に埋むといは
 先將軍の親族廻源家の上臈より何人か知らざるべし且その祖父
 頼政卿より相承せられと傳はく雷上動の弓水羽兵羽の箭のり

世ありく人の知る所紫宸殿は怪鳥を射つるもこの弓箭の徳よ
 めり。されば経任が幻術を打んみ疑ひか。辞を卑し聘を厚し。こ
 此度の大將軍に任しぬる萬一ツ兼諾せん彼賢慮いうやと爽ある辨論
 衆聽を驚せり尼御臺の歡びいへば。祖父時政感嘆して溢るる涙
 笑片向泰時適あう。速は連署を以て駿河前司を召せば死しと
 いへば義時沈吟し駿州既世を憤り受領を棄く隱遁し。連署
 りてことをあふといへる召は應む。蘇秦も等し。説客をば
 転く動し。猶且評議をた。使を擇めり。諫れは
 尼御臺相州の思慮定。當り甲ひと擇んより泰時を使者と
 せん若輩をれども將軍の外戚遠州の孫をれば廣綱を悔む。大將軍
 頼政は。武蔵へ下はべ。と他。仰れば時政義時

兼伏し泰時おん兼仕れといひきくほしく困ト果幕下頼朝の
 かりし時後悔のありて廣綱を召されども竟つひに
 老と少のさるを泰時が責咏りて彼人は説んと心こころを
 難法をもちて死おとしの君のめんをせむるは似よたり。下くだが御説を傳つたふ
 及びて彼人その便宜べんぎに就願つこひまするのみもあるべし何なにもあれ許ゆるさん次う
 この兼兼り届とどむて彼人への起おこりてといへば時政ときまさの領うけ汝なが推量
 さるやあらん許ゆるさんとも許ゆるされども只今のひびき願ねがひの筋すぢはあるべし
 といふを推辞おしくさるらんぬこのめん使つかを勤つとめし餘人よじんに仰付おぼせられよと
 いせもあはれ時政ときまさの氣色きしよ変かりて又またいふ中なかと詰つれば泰時たいとき莞尔わんじと笑わらふ
 故幕下の兒威徳こまくらのこゑいとくも召よく多おほ敷駿州せんとしうを召よく死しぬ彼人の所望しよぼうを許ゆるさん
 変成へんじやうすべしや。されその望ねがひも君のめん為ためにさるやへ許ゆるさん容ゆるさん

勿論もちろんその他の言下ごんげんに許ゆるして重用ちゆうようの美みを示しさん後悔こうかい其処そこは
 立たてし論言ろんげんの汗あせの如ごとく武命ぶめいも亦またあるべし後日ごじつは変へんの破やぶれり
 泰時たいときが腹はらを切きるとも國くには益えきあり君きみは損そんあり強つよくやるはわらはれ再三さんさん
 内思案ないしあんわらほしとちひひ入いる回答こたへしうが義時ぎときの只領ただうりくの尼御臺にぎよたい
 つつとて感嘆かんたん浅あくは太郎たろうが意見いけん道理だうりは稱なへり廣綱望ひろつなぞむし
 あら何なにもあれ許ゆる容ゆるせん和殿わだんが許ゆるせん如実じゆじつが意いを如実じゆじつが許ゆるさん招軍せうぐんも
 執推しやくしも免許めんぎょりらんあつこの肯うづを存ぞんせよと叮嚀ていれいは示しし又または泰時たいときに謹こんて
 壽すいの詞ことばを述現のこ國くには道みちあると死しの野のは遺賢いけんかといへり既すでにかくの
 なるが台命たいめいを頭かぶて戴たい死しこのめん使つかを仰うべしと答こたへり時政ときまさの
 かくは納給のうたふして一族いちぞく齊ひとく退ひせりかく時政ときまさの件けんの變へんの趣しゆを廣元ひろもと
 善信ぜんしんは説示せつしし頼家らいか卿きやうは受うえあひて泰時たいときは使節しせつを賜たまひり変へん既すでに

整るれハ次の日太郎泰時ハ後者を賜ぬ馬の足掻と云ふ。只
二日の程ぬと武藏の太田へ赴た。程ハ駿河前司廣綱ハ
去歳の六月且見姫と媪子井平ハ妻せしこれハ六條藏人仲家の
後と定め渠ガ故郷の名を取りつ又実父兼光と養父仲家の片名を
取多賀藏人光仲と改名させ。子ノ如く鍾愛及夫婦睦しかり
るハ菅蒲の尼公の歡びハ又更ハ悦ぶ。程ハこの年の終ハ
執權時政の下知とて義邦廣光井平義秀ハ迎候する無実ハ
ありて皆赦免せらる。その年ハ人々ハ歡び一家安堵の
事ハせり。かく歡ある中ハ又悲しもの來。菅蒲尼公迂化り享年
九十餘歳。迺伊豆國藍玉の舊院ハ葬送して追薦の法會町寧に
物せらる。中ハ光仲ハ高恩の美とて其の祖母を喪る。ちりつ

且見姫共侶ハ哀慕の情己と死。かくて今茲ハ果敢かく暮れ。明ハ
建仁三年正月下旬廣綱ハ母屋を光仲夫婦ハ譲。藍玉院ハ隱居
せり。其時ハ光仲ハ義邦主後義秀ホダ往方ハと想像り。と
かくあわれども昔の井平あ。れば身と。旅も。廣綱
仕る。主の如く父の如く真中下河邊の両老黨を。師の如く
如く。謙遜して微賤を忘る。時ハ二月下泮有一日鎌
倉の使北條相模太郎泰時下向の。俄頃ハその沙汰あり。廣綱ハ
訝り。が。礼服ハ更て母屋ハ來。使を迎。對面ハ當下泰時ハ坐。小
著。威儀を。其儀項ハ使を。別儀ハ。逆賊任平泉に
跋扈。既ハ敬郡を横領。殆。亂。あり。是。足利
左典。討の台命を。頗勝ハ來。とい。副將時夏ガ叛逆ハ

ありて不慮の敗北は及べり任まらば猛威を振る信夫莊司を高館に
 殺し吉見義邦夫婦を擄みせしむ近頃の事あり抑賊首任任の殘
 忍猛惡のこゝろを雲を吹か風を起し形を隠し影を埋る幻術をばるめ
 復び追討の大將を擇むその任は當るは寡一駿州の將軍の庶族たるを
 りく故幕下も惜せぬへり武藝文学の頼政卿より相兼して家名を
 神箭あり任を討滅えの駿州の外ありける將軍家の事をも
 執權台老衆議一決して則征東の大將をかえんと冀ハ辞とかく民の
 塗炭を救ひ也仰よあつく件の如くと恭しく演説を廣綱謹く承り
 御説畏りぬ然といへども某既隱遁しく鳥髪沙弥たり今更
 弓箭を取るべからばこの美の御免を蒙らんと固辞を泰時推禁りや
 隱遁しあつとも國は居るの國恩あり伯夷叔齊が首陽の飢渴亦何の

益ありあらん泰時若輩なりといへども外戚の下をせり今いづるは歸去らば
 鎌倉へ入らばして中途は腹を切らんと人を救ふ佛の慈悲あり枉く
 免美あれりと説勧めば廣綱は黙然と眼を睜りあつて某今一才子を
 薦あげて任を討むは是廣綱が塔多賀藏人光仲といふのあり
 昔晋の祁黄羊がその子の午といひしを平公は薦りける賢は做つは似く
 ちのいふ嗚呼われど子をうると親もあつた塔も亦如此あり光仲は文武の
 奇才廣綱が類はあつたよりて弓箭の塔多賀藏人彼郎は譲り訖ぬ渠を任任
 追伐の大將軍はせられれば廣綱は副將とありて陸奥へ進發せんこの議却許容
 ちたとき台命は應じ即坐は頭髻を剪拂て斗義行脚はあんのと
 かくいとあひ入ても薦る泰時空く頭を傾け現駿州の塔を六塔の則し
 ちか子として親代るとあつたもいふを願ふ素姓を安ん原は何人の人

ありやと問へば廣綱うち微笑を渠ハ元来木曾の老黨樋口二郎兼光が一子
 なるを頼政三位の養子なり六條藏人仲家ハ遺蹟として仲家ハ為
 女兒某ハ養女なり且見姫を妻し之ハ彼樋口兼光ハ朝敵木曾ハ殘黨ハ
 降参して後ニ誅せしむ光仲ハその心操忠信ヤリて文武ニ長ク證人ハ廣綱ニ只
 その実を取らんとかんが重用せられぬことゆゑ泰時うち點頭その実父を
 かくれ仲家ハの後として駿州の塔あが故障あべくもあはれ對面を許さ
 在宿の飲と問へば廣綱飲まばその彼男子が幸ニ藏人ことと鳴立れば何と
 應る光仲ハ烏帽子の斜推直して素襖の袖を搔後ハ廊下より送り入る
 遙未坐著るを廣綱ハえりて諛使兒目をあつべし渠が舊名ハ媼子
 井平と鳴れく執権ハもろれりめ之故ありて下野ハ足利へ追遣らる
 時夏ハ属られども渠ハ刀野ハ不義を憎く義邦と共に逐電して逆徒也と

相模太郎泰時



知人の才
 泰時
 元仲を薦む

多賀藏人光仲

誣られし蓋玉院は潜びてさうかく去歳の十二月赦免せられてひびけしうた
 あぬもの。あは泰時晴を定めくもんかろうんつうち驚死定一別三来時
 起居安寧致珍重く誘こかくと請れば光仲再拜頓首して別後見泰時
 ありて面忘れもるまて通丈夫なりあひたてりさうり再會の幸甚しと
 回答をせられうち笑く今日より某と和殿ハ則同輩之枉く席を進り免と他更
 かひの廣綱のさのといと光仲をほり近く招死を諛意の趣予が返答ハ
 彼処中くさうん和殿を將軍家ハ薦めまうく經任退治の大将と。それハ
 則副將さうんの旨を存せんと説示せし頼をつ死時夏が謀叛く賊中ハ
 走りてさうんハ傳せられども吉見冠者ハ擒せられ存亡定まらざるよしと
 ちめく兼知仕の驚あつ所之彼人と某ハ断金の交あり信夫が館ありたりと
 あらうしを残念れ國家のめん友のる馬前執戟の歩卒とありて逆賊と

討んり素より望む所れども某何の徳わりく大将を汚死況家翁を
 副とくその上はあんと冥利外聞物体か御許容あつたさうんは
 この議むくりハ兼引がごとくをさうく辞やかん廣綱頭さうち掉くそれハ和殿が
 私かり忠臣ハ家礼を説く和殿が大物さうんも廣綱副將さうんも全
 合體く賊を討功成と死ハ君の死則國家の幸かびや御許容あつた
 辞退せんといふあつた既決せり再議さうとあつたと制りく泰時さうち
 對ひ某ハ若居水飲の隱者之繼台命と辱まといふとも今更柳宮さうん
 けん願ハ光仲を召さるべし又某ハ名代の老黨中隼入守貞と鐵倉ハ
 遣をへ御許容あつとも野人のさう隨うりく執達を賜へといふ泰時さうて
 且く深念くがさういひつるは強くその身を伴ひがさうりや駿州ハ
 うりとも台命ハ應せられハ使者の面目國家の幸ハこのさうりやんハ

薦奉のすま届くひあり將軍家の執權も俟びてくるといひける鎌倉
 おでひ三十里一昼夜もおぼつちや今日直さま伴人準備せらるる
 がせに廣綱へ歡びて次の間より傳へる間中下河邊の兩光黨
 云々と命をれば間中守直下河邊高吉の使使泰時は見泰しと光仲の
 後者を擇まざる或は諛使は果子をもちかどは程は奴隸の馬を鞍を置
 練と表す牽ゆをかくく光仲は且く奥へ退れと鎌倉へ趣くよと
 且見姫は告あつたれば姫はさるり家中の男女歡び祝して奔走し光仲
 衣裳を更りとく舊の席は著しく廣綱の名代間中隼人光仲の
 下河邊小三郎この他光仲の後者長海老尾加世丸若黨奴隸に至るまで
 精悍しく行装しく泰時の後者は打雜りちや外面はどろろ準備不
 整へば光仲は泰しく廣綱は辞し別れ泰時は後ひて齊一馬を騎せ

廣綱の立ちがら前門のこゝへ送り且見姫の物見の窓より婢女は
 うら冴れく光仲の馬の尾筒のこゝを尻あつて目送り多畢竟光仲
 將軍頼家卿は見泰しく徑任退治の大將は拜任せられ廣綱と共侶は
 夥の軍兵を招き陸奥へ發向し徑任を討ふ及びて戦の勝負如何
 と編を嗣死巻を易く第四編は解分るをんばあらん
 作者云朝夷義秀がゆこの編第廿三條は説物その外はまごその去來を
 演るは暇わらぬ且江三二廣光馬養標吉郎嗣忠ホがらゆも並に第四
 編刊行の日その巻くゆく分解せん徑任が物語あが長やうなればあり
 ○又云拙著玄同放言初版人事部の上まぐ刊行を製本方よ
 成まり亦その書肆のぬまのゆもの

朝夷巡鳴記全傳第三編卷之五終

編述

曲亭馬琴稿本



出像

一柳齋豊廣画



刊字校合

平安

標亭琴魚考訂

戊寅秋七月画者備書卒業同年冬日刻成
文政二年歲次己卯春正月二日製本發販

刊行

江戸馬喰町三丁目

若林清兵衛

筋違御門外神田平齋

山崎平八

書肆

大坂心齋橋筋唐物町

河内屋太助

江戸著作堂主人新編畧目

浪華書林 文金堂藏梓

朝夷巡嶋記

初編 二編 三編
統計二十五卷 既行

俳諧 歲時記 横本

全二冊

同書第四編

來己卯十二月相違
あく賣出して

月氷奇縁

全五冊

里見八犬傳

初編 二編 三編
刊行 第四編 嗣出

新累解脫物語 右同

全五冊

燕石雜誌

奇談珍說弁論
奇終玲說弁論
りろ死隨筆之全六卷

昔語質屋庫

全五冊

家傳神女湯

一包 婦人諸病の第一産前産後
代百編 ありかゝり茶まゝと久し功能く
中、由をえとを製方とつまびらり
りてその效よりのきあふ九と百倍
大包二百粒余入代式朱中包二十六粒入代式
めん毎月つ死むのさるる小用ひく苦痛ぬひさか
をりお下りかひさる小妙あり 一包六十四包 半包三十二包

精製奇應丸

婦人つ死虫妙藥

製藥并弘所

江戸元飯田町中坂下
南側四方の店に向

瀧澤氏精製

取沙所 江戸明前和泉屋市兵衛
由亭画 浪華書林

文金堂

本村太助

